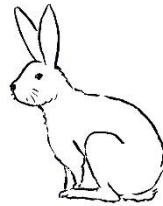


家康の鷹狩とお茶屋寺

—安土桃山時代—



「この辺りは、鷹狩たかがりをするには良いところだな。今日はいい獲物えものに巡り合いそうだ」
かわてぶくろ

皮手袋をまいた腕に鷹をとまらせた徳川家康は、遠くとくがわいに富士山を望みながら言いました。ここは相模国豊田郷の近く、大山の雄姿も間近に見えます。

「どうやらその獲物を見つけたようです」

家康のそばにひかえていた鷹匠たかじょう（鷹を訓練する人）が、野原の先を指さしました。



勢子（獲物を追い詰める役の人）たちが、
鉦や太鼓を打ち鳴らしながら獲物を追い立
てています。

そこに一匹の野ウサギが顔を出しました。
それを見た家康は、腕を動かし鷹をそちら
に向けて放ちます。

鷹はいったん大空に舞い上がり、それから
急降下すると、見事にその野ウサギを捕ら
えました。

家康は、その鷹の降りた所まで行き、「でか
した、でかした」と言って餌の肉を鷹に与え、

獲物を手にしました。

天正十八年（一五九〇）、とよとみひでよし豊臣秀吉は関東の雄、小田原のほうじょう北条氏を滅ぼして、天下を統一します。

このとき、北条氏に代わって関東の支配を任されたのが徳川家康です。

家康は、関東支配の拠点きょてんを江戸城に定めます。

「知らない土地をどのように治めたらよいか」

家康は、考えました。

「まずは、人々がどのような暮らしをしているか、実際に見てみなければならぬ」

鷹狩は、ただ単に野山の獣を狩っているわけではありません。その目的は、兵の訓練であり、土地の地理を知りことであり、そこに暮らす人々の様子を見ることでもあります。

その日の家康は、順調に獲物を重ねていきました。

「どうだ、この辺で一息入れようではないか」

「それならば、この先に清雲寺せいうんじという臨濟宗りんげいしゅうの寺があります。そこで休ませてもらいまし

よう」

これを迎えた清雲寺では、家康とその側近らを本堂に上げ、ほかの家来衆は境内けいだいの適当な場所で休ませました。

「大したおもてなしはできませんが、これは当寺の井戸の水で入れましたもの」

と言って、住職じゆうしやくは一杯のお茶を家康に差し出しました。

それを一口飲んだ家康は「うまい」と低くうなるように言うと、残りを一気に飲み干しました。

「今度からこちらに来たときには、必ずこの寺に寄ることにしよう」

続けて、家康は聞きました。

「ところで、この辺りあたをうまく治めるにはどうしたらよいかの」

そう尋ねる家康に、住職は言います。

「北条家は、戦には負けましたが、民には良き御領主でした。民へのお心遣いこころづかが大切です。

また、御家来衆にも優秀な方が多くいます。彼らにも活躍の場を与えたらどうでしょう」

家康は、大きくうなずきました。

こののち、家康は、鷹狩の折にはしばしばこの清雲寺に立ち寄って、お茶を飲むことを楽しみにしました。そうしたことから、いつしかこの寺はお茶屋寺ちややでらと呼ばれるようになったのです。

また、家康から賜たまわったという葵あおいの紋もんが入った銚子ちやうしと茶碗ちやわんが、今も寺宝として伝えられています。

作・画／平塚てづくり紙芝居の会 たもん丸